

マルベルデ考

加藤 薫

はじめに

ここ数年、メキシコのサブカル的大衆文化の一表象と考えられるサンタ・ムエルテ（骸骨の聖母像）探しに奔走している。おかげでサン・シモン信仰やサン・バスクアル信仰など図像を伴う民間伝説や伝承の支流にも出くわし、実に豊かで奥深いメキシコ人の精神文化の様相を改めて確認する結果となっている。しかし民衆信仰間の相関図や時間軸、空間軸に分けた全体の見取り図が描けるには至っていない。

この一連の調査の中で出会ったが、まだどのように扱っていいのかわからないものの一つにマルベルデ信仰というものがある。このカルトの総本山はメキシコ北部の太平洋に面したシナロア州の州都クリアカン市内にあるのだが、クリアカン市はメキシコの中でも特に凶悪犯罪発生率の高い都市で、一般観光客は敬遠すべき都市として知られている。

このクリアカンとマルベルデ信仰が結びつくには必然的な理由がある。一言でいえば犯罪者、とりわけ違法な麻薬の物流に関与する人たち（以下「ナルコ業者」と表記）のカルトなのだ。だが多々ある民間信仰の例にもれず、そう単純に割り切れない要素も多く持つ。

実在したマルベルデの活動期間は19世紀末から20世紀初頭である。にもかかわらず、英語やスペイン語で出版された先行研究は20世紀末から21世紀になってからのものが多く（といっても20点に満たないが）、またマルベルデについての記述に焦点をあてた日本語論文は筆者の知るかぎり1本だけである。その意味でまだ新しく発見された研究対象ということができる。まずはその唯一の研究論文である、小林貴徳著『義賊 (baddido social) から民衆聖者 (bendito popular) へ—メキシコのマルベルデをめぐる民衆宗教の動態』（加藤隆浩編「ラテンアメリカの民衆文化」、行路社、2009年、第5章収録）を参照しながら考察を進めていこう。小林論文は基本的に文化人類学的発想での記述であり、筆者の美術的、図像学的興味からのアプローチとは異なるのだが、興味深い分析と情報に

あふれている。しかしまたその思考プロセスにおいてはインターネットから検索した情報から論を組み立てたこと、何よりもクリアカンでの現地調査を実施していない、という限界も弱点として挙げられる。(注01)

1.

クリアカン市を州都とするシナロア州の主産業は昔も今も農業であるが、他の多くの州の場合と同じく、少数の大土地所有者に対し、大多数の農民は土地を持たないか、持っていて安定・自立した経営基盤となるほど広大なものではなかった。また規模の大小にかかわらず、何か付加価値の高い農業特産物があったわけでもなかった。19世紀後半から進められた外資の導入による大規模製糖工場建設や鉱山開発による経済促進政策は結果として伝統的農業共同体の崩壊現象や貧富の格差を拡大させただけだった。1910年にはじまるメキシコ革命後でもシナロア州の政治経済的变化については特記すべきものがない。つまり社会構造に大きな変化はなかったようだが、この辺りの歴史的・経済的分析については筆者の専門外ということもあり、資料の蓄積もない。今後の研究課題ではある。

シナロア州の経済に転機が訪れたのは第二次世界大戦時期であった。この点については前述の小林論文の注記で日本語で要領よくまとめられているので、その文章を引用する。出典はベドリャ・アルファロ(Bedolla Alfaro)の著作からである。

「シナロアで麻薬栽培が拡大したのは第二次世界大戦期だった。モロッコやトルコで栽培・精製されていたアヘンは、軍医利用のために米国に輸出されていた。しかし、ナチスが制海権を握るとともにこの物流は閉鎖された。米国政府は、メキシコ北部山岳地帯が麻薬栽培に適していることを突き止めると、メキシコ政府と約款を結び、麻薬栽培の技術移転を推進した。両国間の協定が廃止された終戦後も、多くの人が麻薬の買い付けに訪れるようになり、このとき富を得た地元の有力農家は、後に麻薬カルテルとなる組織の原型を形成していった。」(注02)

アヘンやモルヒネ、ヘロインの原料となるけしの栽培でシナロア州の経済を牛耳った諸ファミリアは、1970年代には麻薬業界の新興勢力によって一掃され、現在ではけし畑を見ることはできない。代わって零細農家の収入を支えたのは大

麻（マリファナ）であった。公認されているわけではないのだろうが、2009年でも主要国道から離れた山間部の道路を走ると、大麻の群生する畑を容易に見つけることができた。しかし大金獲得の欲望に獲りつかれたナルコ業者にとっても、また麻薬による経済発展と賄賂という恩恵を味わったシナロア州の政治家からみれば、大麻ビジネスはリスクの割りに儲けの少ないものに映った。より利益率の高い事業への転換として、小林論文では「...シナロア州は、コロンビアから米国へと流れるコカインの中継基地もなり、その結果、州都クリアカンはナルコの中心地として知られるようになった...」と大麻以後の展開を要約している。

コロンビア産コカインのメキシコへの流通経路について、その全貌を明らかにするアクセス可能な研究資料に筆者は接したことはないし、小林も同様である。しかし、かつて私立探偵であり、法律事務所や保険会社のコンサルタントとして働いた後に作家に転じたドン・ウィンズロウ（Don Winslow）は、かなり確かな情報源から獲た「コンドル作戦」（注3）に関するデータを基に長編小説を書き上げた。2005年に発表した小説 *The Power of the Dog*（東江一紀訳「犬の力」、上・下巻、2009年8月初版、角川文庫）は、1975年から2004年の約30年間に及ぶ米国とメキシコの麻薬戦争の実態をフィクション形式で書いている。その中にシナロア州の新興ナルコ業者がコロンビアのコカイン・マフィアと提携し、米国市場へのルートを開発する経過が出てくる。

勿論、筆者の興味は、ナルコ業の深みにはまってゆくメキシコ人の若者たちがクリアカンにあるマルベルデの礼拝堂を幾度となく訪れる場面にあった。彼らの参拝は巨万の富を得た後でも続き、マルベルデへの献身を死の直前まで行うのである。ちょっと論から逸れるが、筆者は2009年9月にクリアカン市内を昼間のことだがタクシーで走り、さらに短時間だが散策した。その時の印象でも、農業経済中心の地方にある一都市にしては不釣り合いなほど道路はきれいに整備され、巨大かつ豪華な公共施設が立ち並び、銀行支店が多く、五つ星クラス以上の高層高級ホテルが点在する光景を確認している。裏社会で流通する金銭が洗浄されて表社会に還流していることを推察するに十分な体験であった。ちなみに屋外は摂氏40度を越えるのに、立ち寄ったマクドナルド店内は20度設定の冷房がきいており、電気など使いたいだけ使える様子だった。犯罪者たちは、マルベルデの持つ義賊というイメージ、すなわち持てる者から奪い、持たざる者に分配すると

いう社会正義を実践する（たとえ非合法であっても！）自己アイデンティティーを競って獲得しようとしているのだろう。

2.

小林論文は、マルベルデ伝説を、世界に存在する多くの義賊譚の一つとしてとらえ、その義賊譚の再生から〈民衆宗教〉に変換してゆく相を明らかにするという方法を採用している。(注04) まずはマルベルデの義賊性について確認しておこう。

マルベルデの本名はヘスス・フアレス・マソ(Jesús Juárez Mazo)で、このため一般にはヘスス・マルベルデと表記されている例が多く、クリアカンの礼拝所の看板もそうになっている。(図1)「ヘスス」とはキリストとなったイエスのスペイン語読みであり、マルベルデの誕生日は1870年12月24日となっている。真偽の程はわからないがもしこの誕生日の設定が創作ならキリストのイメージと重ね合わせる操作がどこかで行われた可能性もある。通称であるマルベルデの由



図1

来説は二つある。一つは行動の際に緑色(verde)のバナナの葉をカモフラージュに使って身を隠したことに由来するもの、もう一つは富裕者にとっては悪い(mal)行動をとり、襲撃後は緑の樹や植物で覆われた山中(en lo verde)に立てこもったことに由来するものである。(注05)

山賊になるきっかけは、幼少時に体験した貧農の両親の餓死であった。その怒りがまずは平然と搾取を続ける地主に向けられた。そして同じように劣悪な境遇に生まれ育ち、生命以外何ももたないという仲間たちが次第にマルベルデの元に集まりはじめてからは、集団で富裕階級のものである荷馬車や倉庫を襲い、戦利品を貧民に分配した。メキシコのロビン・フッドとも呼ばれる所以でもある。

一方、米墨戦争の結果、新しくアメリカ合衆国領に組み込まれた現カリフォル

ニア州において、19世紀後半からグリーンゴ（アングロサクソン系白人）の理不尽な虐待にあって次々と抹殺されてゆくメキシコ系住民のために抵抗を続け、同胞人を救済した義賊ホアキン・ムリエタのイメージと重なるものもある。（注06）

また小林論文は、州知事の豪邸に忍び込んだマルベルデが逃亡の際に壁にサーベルで「ヘスス・M参上」というメッセージを刻んでいったという逸話を紹介している。（注07）この話しは、カリフォルニア州がまだスペイン領（ヌエバ・エスパニーヤ）の一部だった時代を舞台に、米国人作家ジョンストン・マッカレー（Johnston McCulley）が考案し、1919年に発表した小説の主人公である架空の義賊ゾロ（Zorro）の行状と類似する。どこかで刷り込みが行われた可能性もある。

マルベルデには懸賞金がかけられるようになった。軍、警察、そして賞金稼ぎのハンターにも追われるようになったマルベルデの活動範囲は狭められ、ついに賞金稼ぎのハンターたちとの銃撃戦で脚を撃ち抜かれ、傷が悪化して身動きできない状態になった。その時点で自ら追跡の軍に投降した。生きて捕らえられた時に同志たちに伝えた最後の指示は、自首したのだから懸賞金は本来自分に与えられるべきもので、それが貧民たちに直接分配されるよう政府関係者を監視せよというものだった。そして逮捕の後、1909年5月3日に絞首刑となった。銃撃戦で脚を撃たれ、身動きできなくなったところで逮捕、そして処刑というプロセスは1967年10月における革命家チェ・ゲバラの最期と類似しているように思われるが、これは筆者の深読みしすぎかも知れない。

いずれにしてもここで終わる話しならば数多くの義賊譚の一つに過ぎない。マルベルデがその死後にどのような形であれ、民衆の信仰対象となるには、まず悲劇的な死によって生前の行為が贖罪される必要がある（事実そうだった）。がそれだけでは十分といえず、ある種の奇跡話しと結びつくことが必須の条件である。ここで幾つかの奇跡話しを拾ってみよう。

まず処刑を命じた州知事は、無法者への見せしめということもあって伝統的なカトリックの作法に基づき埋葬を許さなかったようだ。このためマルベルデの死体は樹につるされたまま放置された。この処置は、かつてメキシコ独立運動の勃興期に、イダルゴ神父と行動を共にした4人の若き軍人指揮者たちが、反乱の罪で処刑された後も埋葬が許されず、壮絶な攻防戦のあったグアナフアト市アロンディガ・デ・グラナディータスという巨大穀物倉庫（現博物館）の外壁四隅で数

年間もさらしものになった故事を彷彿させるものだ。

最初の奇跡は処刑の数日後に顕われた。この話しはルイス・アントニオ・ガルシア・Sの記述を小林は論文の中で日本語訳で引用しているので、それをさらに要約した形で紹介する。(注08) 即ち、ある商人がラバに金銀の荷物を積んで移動していたが、どうかしてそのラバと荷物を見失った。探している途中でマルベルデの遺体のぶらさがっている処刑所にたどり着いた。彼が貧民の味方だったことを思い出し、もう死んでいるにも関わらず、その遺体に向かって救いを求めた。すると翌朝になってラバも荷物もそのまま商人のもとに戻ってきたという。マルベルデに感謝する商人は、その日のうちにマルベルデの遺体を降ろし、地面に横たえたと周りに石を積んで塚にした。地面に穴を掘って埋めたわけではないから州知事の禁じた「埋葬」ではないという言い訳が通用した。マルベルデ処刑から約一ヶ月たった6月2日にかの州知事は病死した。

そしてこの頃までには、塚を構成する石にはマルベルデの霊力：ウルトゥス(注09)が放射されて失せ物の探索や旅の安全、農民や漁民の収穫、病気・事故障害からの回復など民衆の日常的祈願の媒介となるという信仰が形成されたようだ。塚を訪れた人々は願い事を封じた石を積み上げ、願い事が叶った人はその石に感謝の意を告げて持ち帰ったり、そのまま捧げたりするようになった。筆者は1950年代に撮影されたとする石塚の白黒写真や、1970年代初期撮影の豊漁に感謝する漁民からの鮮魚の捧げ物を写したカラー写真のコピー資料を収集している。どちらの写真にも現在の礼拝堂にあるようなマルベルデのアイコン類は一切写ってなかった。

ともあれ、この節のまとめとして、再び小林論文の一部を以下に引用させてもらう。

「たしかに数々の奇蹟が語られるようになったが、これらの奇蹟譚は、生前の義賊譚の延長上にあり、貧民の味方という属性を基盤としていた。祈願内容も、豊作祈願や無病息災、失物の搜索や難事の解決などが中心であり、当時は、現在のような『ナルコの守護者』という意味は備わっていなかった。

また、神の恩恵を媒体するのは、あくまでマルベルデの『魂』であって、マルベルデを『聖人』と崇めるものではなかったようである。簡素

な造りだった当時のマルベルデ塚は、市街地から離れた地点にあったこともあり、訪れる信者はさほど多くなかったといわれる。」(注10)

3.

さて、ここまでの展開で大前提としているのは、少なくともマルベルデなる人物が実在したことである。しかしながら当人の生前の写真や肖像画、彫像が存在しないこともまた明らかで、たった39年の生涯とはいえ、写真1枚ないというもの不思議といえば不思議なのである。現在ステレオタイプ化されて流布しているイコンは1950年代以降に創作されたものであるというのはほぼ定説のようだ。この点だけをとり上げるならば、メキシコにおけるその出現時からすでに図像や図像学的属性が確定したまま民衆の信仰対象となっていたグアダルーベの聖母の場合とかなり異なる。

1950年代に開発されたマルベルデのイコンの原モデルはシナロア州出身で唯一無二の二枚目男性俳優で歌手でもあったペドロ・インファンテ(Pedro Infante; 1917-1957)だとされている。グアムチルという小村に大工の息子として生まれたインファンテは、クリアカン交響楽団の合唱団でその歌手としての才能を見出され、ラジオ局で番組を持つほどになった。その後映画プロデューサーであるイスマエル・ロドリゲスに偶然発見され、生涯に45本の映画に出演するほどの人気者となった。飛行機マニアで操縦免許を獲得した。そして自分の所有機を操縦してメキシコ市からユカタン半島のメリダ市に向かう途中の事故で死亡した。享年40歳。

マルベルデのイコンがシナロア州で開発された時期と、マスメディアでインファンテの死亡の報や過去の業績が大々的に採り上げられていた時期とは一致する。39歳で処刑されたマルベルデと40歳で死亡したインファンテの容姿は合わせやすかったということも考えられる。色白で口ひげをはやし、髪の毛は短くきちんと刈上げて広い額を見せ、白い清潔そうなシャツをきちんと着こなす典型的なインファンテの肖像(図2)は、眉毛や口ひげを濃くしてランチェロやカンペシーノ的性格を強調されているが、確かにかなりの部分でマルベルデのイコンに投影されているようだ。(図3)

マルベルデのイコンで興味深いのは襟元の装飾布で、シャツの襟の首元ボタン

を留めてその上にネクタイを結ぶのではなく、首元ボタンをはずして襟を立て、その内側の素肌に直接ネクタイ結びにした短いバンダナをひらめかせている。バンダナの用途は砂埃の鼻や口への進入をふせいだり、犯罪の際には顔を隠すマスクの役を果たすもので、このため普通は首の後ろに結び目をもってくる。マルベルデの表象では、実用品というより純粋な装飾品として扱われているのだが、その目的が犯罪者というイメージを払拭してアイドル化する目的で考案された意匠な

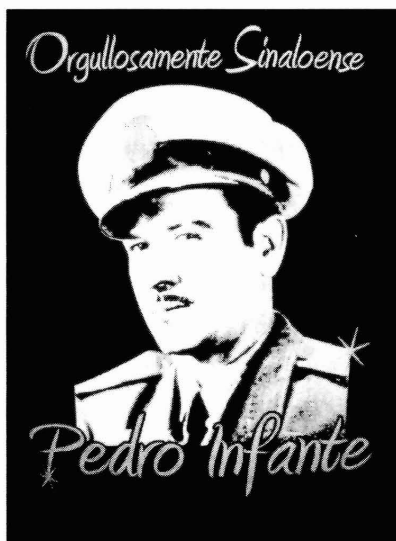


図2

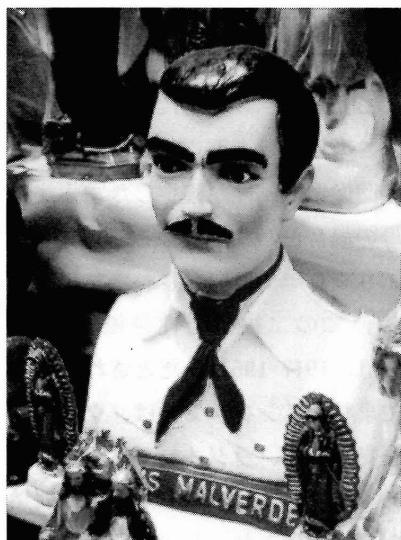


図3

のかどうかまではわからない。通常の真四角のバンダナではなく、細長いネクタイ仕様の布を肌に直接巻きつけているのは、首吊りの刑に処せられたことを象徴しているのかもしれない。(注11) また帽子を被っている場合、メキシコのイメージを演出するつば広のいわゆるソンプレロではなく、米国カウボーイや騎兵隊が着用したテンガロン・ハットやその変形であるステットソン・ハット式デザインのもが使われるのも興味深いだが、この点についての図像学的先行研究は皆無である。

実際の容姿や行動がどのようなものであったにせよ、死後から義賊のイメージを強めるマルベルデが、1950年代末からペドロ・インファンテというスターの容貌と二重写しになりながら民衆アイコンとして認識されてゆくプロセスは、明ら

かにマルベルデ信仰の新段階である。つまり民衆が銀幕のスターに憧れるような願望や夢をまたマルベルデが担うようにリセットされたということだ。

4.

さて、現在クリアカンにある1980年完成のマルベルデ礼拝所のの話題に移ろう。小林は「あるひとつの宗教的シンボルが生まれ、信仰は広範化してゆく過程では、その崇拜の中心となる祭祀センターや、聖なるものの顕現を裏付けるような精緻の発展が重要な意味を持ち、... (中略) ...マルベルデについても例外ではなかった」と述べている。(注12)

1970年代に見られるシナロア州の経済発展により州都クリアカンの人口は増加した。この事態に対応するため、州都クリアカンの再開発は必須となり、マルベルデの石塚周辺も州政府の新庁舎建設のために取り壊すこととなった。喜んだのは地元のカトリック教会組織で、この異教的崇拜を根絶する絶好の機会と捉え、積極的に撤去を支持した。しかし、工事は難航した。この点については、ダニエル・サダの記述を日本語訳で引用した小林の文章が指摘している。(注13) 要約すると、工事用重機の度重なる故障、近隣被害、重機操作者の死亡など不吉な事件の発生であった。また工事終了後も浮遊する霊の気配を感じさせる現象も多発したようで、結局、誰からともなく、跡地に再び石が積まれ始めたようだ。その後、夢でマルベルデの啓示を受けたという男性を中心に本格的な礼拝堂建設要求運動が興り、実現したという。

両切妻型トタン屋根の鉄骨シェルターで全体を蔽い、壁は正面と左右を白く塗られた鉄フレームに青、緑、黄色の半透明アクリル板をはめこんである。巨大な温室構造とでもいえるチープでキッチュな建造物であり、屋上に建てられた二本の十字架の存在に気がつかなければ、ただの二階建て倉庫としか思えない。(図4) このシェルターの内部に礼拝堂や売店があり、隣接して花屋もある。内部は壁のアクリル板を通して入ってくる陽光のせいで明るいが空調設備はなく、内奥に入るほど暑いが、出入り口付近は風通しがよく涼しく感じる。

出入り口の扉は透明ガラス入りサッシになっており、このため、扉が閉められても礼拝堂前の歩道を往来する人には内部の様子をいつでもみることが出来る。建物のほぼ中央正面に主礼拝堂がある。(図5) 床は白のタイル張りで、壁はコ

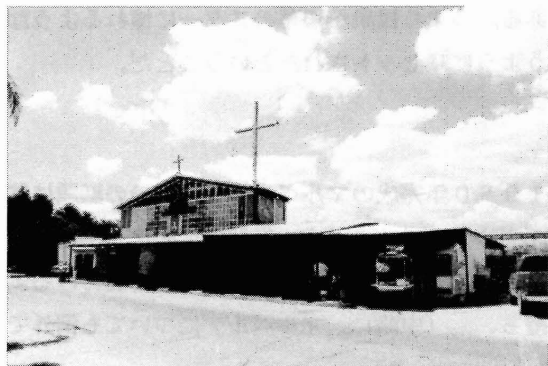


図 4

マルベルデの立像を印刷したガラス筒に入った蠟燭ボトルが置かれている。正面からみて左側に、メキシコ北部から米国サウスウエスト地域のヒスパニック社会でおなじみの「アトーチャの御子イエス像」が置かれ、平和のシンボルである鳩と永遠の生命のシンボルであるハチドリ（ハチドリ）の刺繍がほどこされたマントを着用している。（図7）マルベルデ胸像の右側には聖水盤がおかれ、その後ろに飾られた生け花の後ろに古い傷だらけのマルベルデ胸像が隠されていた。ちなみに白いシャ

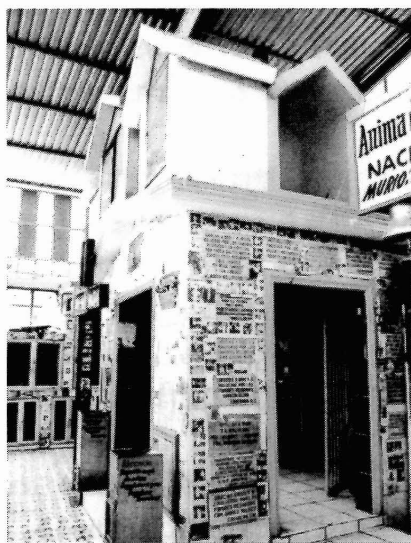


図 5

ンクリートに白の漆喰仕上げとなっているが、諸エスポト（奉献画、写真、プレート、メッセージレターなど）で隙間なく天井まで埋められている。礼拝堂正面に3枚のガラスパネルで仕切られた高さ1メートルほどの主祭壇がある。

（図6）中央にマルベルデの胸像が置かれ、その手前にマ

ツ襟の刺繍や垂らしたネクタイの意匠デザインは古い像の方がおしゃれな造りになっていた。ガラスパネルの手前にはひざまづいて祈禱する参拝者用に革張りのマットをおいた木製家具が置かれている。（図8）

振り返るとこの礼拝堂左脇にほぼ等身大のグアダルupesの聖母立像が置かれている。（図9）反対側の右側には3人がけ木製ベンチが置かれ、祈禱の順番を待つ人たちが坐れるようになっている。白いタイルの床にはあちこちに蠟燭筒が置かれ、炎が絶やされることはない。（図10）小林論文には両壁上部にニッチョ

がありタダイの聖ユダ像が置かれているとの記述(注14)があるが、筆者の2009年9月の調査では確認できなかった。この主礼拝堂もそうだが、周囲のスペースは、諸エスポトだけでなく、寄進者の設置した礼拝用の祠がぎっしりと並べられ、場所によっては3層に置かれているところもあった。

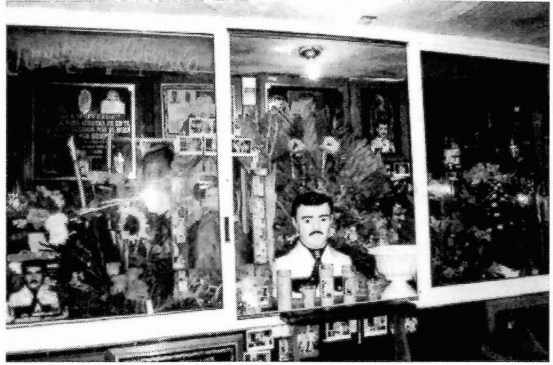


図6

エスポトに記入されたメッセージは実に多用である。また近年のデジカメの普及のせいかスナップ写真の印画紙裏にメッセージを書き添える例も増えており、一度壁からはがしてひっくりかえさない限り、その映像が何を意味するのか判別できない事例も多い。(図11) その故に「一般的におこなわれているエスポト(*本稿ではエスポトと表記)と異なって、この礼拝堂のエスポトには、受け



図7

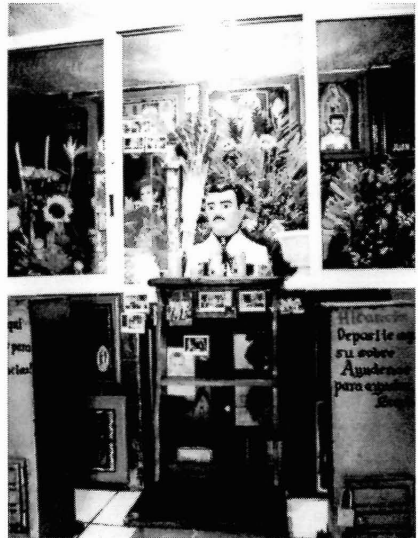


図8



図9

た恩恵の具体的内容が記載されているものは少ない」(注15) という小林論文のコメントが妥当かどうかは判断できない。解読できるものだけを確認した範囲でも、筆者の調査したサンタ・ムエルテやサン・トマスへのエスポト添付メッセージと大差ないものばかりだった。(図12) だから小林の「奉納者に関しては、家族名や頭文字、通称で書かれていることが多い」(注16) というコメントに関して言えば、マルベルデへのエスポトに特殊なことは思えない。小林はメッセージのあいまいさや奉納者の匿名志向を、ナルコ業に従事するマフィア系人物の奉納が多いからだろうと推測している

(注17) が、この推測の前提条件にはならないだろう。

礼拝堂周辺にはウッドベースやスネアドラムなどの楽器が置かれていた。管理人らしき女性に依頼すると5分後には3人の中年男性が現れ、バンドネオンとギター、それにドラムで「貧民の味方、マルベルデへの讃歌」という一番ポピュラーな曲を演奏してくれた。歌詞の中には「義賊」、「貧しい人を助ける」、「願いをかなえてほしい」、「俺は旅に出る」、「家族の安全を守って」、といったキーワードが登場した。演奏はビデオカメラで収録し、チップをはずんだ。(図13)

5.

小林論文は、反体制的行為から貧民救済に貢献した義賊マルベルデへの信仰と、反社会的活動に手を染めるナルコ業者が急速に結びつい



図10

たのは、1970年代に開始された前述の「コンドル作戦」で追いつめられるようになったナルコ業者たちが、グアダルupesの聖母のようなすでに既存体制に組み込まれた伝統的カルトではないものに、精神的な庇護や救済を求めた時点からだという。「このとき彼ら（ナルコ業者；筆者加筆）



図11



図12

この新しい局面とは、国境を越えて米国からコロンビアにまたがって想定されているナルコ流通経路にマルベルデ崇拝が広がり、すでに「ロサンジェルス、クリアカン、コロンビアのカリにあるとされる三大礼拝堂に関する言説」（注20）が生まれている、ということである。筆者はまだ口

は、前世紀に州警察と対峙していたマルベルデの生涯と義賊譚を自らの生に重ねるようになった...」（注18）というナバロの文章を引用し、「ナルコによるマルベルデ崇拝をめぐる同時代性については疑う余地がなく、「マルベルデ譚は新たな局面を迎えることになった...」（注19）と結論づけている。



図13

サンジェルスやカリに存在するというマルベルデ礼拝堂を調査したことはないし、ナルコ業者のいるところにマルベルデ像ありという設定での図像調査も計画したことはないのでこれ以上の言及は止め、最後にやはりメキシコで反一公権力、反一體制という民衆の負のエネルギーを集約していったサンタ・ムエルテ図像との関連で締めくくる。(注21)

筆者はサンタ・ムエルテの図像調査を実施してきたが、図像的には異質な世俗的特性丸出しのマルベルデ像が共生している事例というのはまだ少ないと認識している。ただ共生しているとまでは言えないが、サンタ・ムエルテ礼拝所の一部に新しくマルベルデ像を置いた祭壇がある共存の事例はかなり目になっている。筆者はまた、信仰面からその共生の位相を分析したことはないし、サンタ・ムエルテとマルベルデ図像が共生する場所の分布マップなど作成するには至っていない。しかし、ソノラ市場などカルト・グッズを売る店の集まっている場所ではサンタ・ムエルテ商品を扱っている店にマルベルデ像が置かれ始めた現象は認識している。ここでは首都メキシコ市内に限っての、共存から共生の可能性を示唆する現象を素描してみる。

サンタ・ムエルテ元年、即ち一つの奇蹟譚から教義的にカトリック教会と和解し、少なくともサンタ・ムエルテ信仰が黙認され、一般に公開された礼拝所が生まれたのは1965年だとされているが、メキシコ市内の犯罪多発区として知られるテピート地区に公開の礼拝堂が登場したのは1962年のことだった。(図14) この時点でマルベルデ像が併置された痕跡はない。マルベルデ像がメキシ



図14

コ市に登場したのは、早くても1990年代後半のことだと認識しており、メキシコ北部のナルコ業者が首都圏でのビジネス展開のために新たな拠点を築き始めた時期と一致しているようだ。あらゆるタイプのカルト商品を売るソノラ市場でマルベルデ関連グッズが各店舗で当たり前のよう

に並ぶようになったのは21世紀初頭になってのことだったらしい。(図15)

小林は首都圏で初の公開型のマルベルデ祭壇が建てられたのは2006年12月のことだった、としている。(注22)

ドクトレス地区のドクトル・ベルティス通りでアリシアという女性が管理するこの

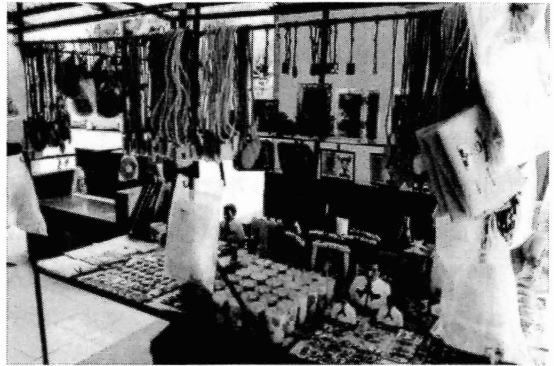


図15

祭壇はしかし元々はサンタ・ムエルテ用の礼拝所だ。ただこの礼拝所の新規さは、主であるほぼ等身大のサンタ・ムエルテ像が横に押しつけられ、それとほぼ同じ等身大サイズのサンタ・ムエルテ立像が中央に置かれていることである。首にはネクタイの上に絞首刑用の縄が巻かれている。

政治や教会組織などの公権力を脱構築しようとする民衆の発想がサンタ・ムエルテ信仰を生んだとしたら、その負のエネルギーが同じ負のエネルギーを持ち、より直接的な悪とされるナルコ業者の信仰対象であるマルベルデを呼び込み、育て、増殖を許している現象が顕在化してきている。とひとまず結論づけられる。美術的な観点からすれば、ステレオタイプ化され、大量生産されるマルベルデ図像は、そのわかりやすさの故に図像学的には面白いとは今だに思えないのだが、反権力志向をもつ民衆文化の発露という点では筆者も注目している現在もっともクールな文化現象だとは言える。

脚注

01. 小林貴徳著、『義賊 (bandido social) から民衆聖者 (bendido popular) へ—メキシコのマルベルデをめぐる民衆宗教の動態』、加藤隆浩編「ラテンアメリカの民衆文化」、行路社、2009年、pp. 111-136.
02. 小林、同上書、p. 134、注記9.
03. 1970年代から麻薬ルート撲滅のために米国とメキシコ政府が協力し、CIAやDEAがメキシコ州兵に武器供与、情報提供、訓練、作戦立案し、メキシコ側

は1万人以上の州兵や警察組織を動員して麻薬栽培から販売までの流通ルートを壊滅させようとした作戦。

04. 小林、前掲書、pp. 112-114.
05. 小林、前掲書、p. 117.
06. ホアキン・ムリエタの考察については、加藤薫著、「『怪傑ゾロ』の研究事始め」、麒麟第11号、神奈川大学、2002年、p. 29。参照。筆者はムリエタが唯一無二の存在ではなく、世代の異なる複数の人間によって名前が引き継がれていったという説を採用している。マルベルデは一代だけのものである。
07. 小林、前掲書、p. 118.
08. 小林、前掲書、pp. 118-119.
09. キリスト教において聖人の遺体や生前の所有物を聖遺物という。聖遺物の聖性を保証したのは、聖人の身体に生前から宿り、死後もその遺体に残存し続ける特別な力であった。この力のことをラテン語でウルトゥス(virtus)と呼ぶ。ギリシャ語ではデュナミス(dynamis)といい、ローマ時代以前にギリシャで流布していた英雄崇拜の中ですでに適用されていた。このウルトゥスはウイルスのように伝染するもので、聖遺物は常にウルトゥスを放射しているが、このウルトゥスの放射を浴びた事物もそのウルトゥスを宿すと考えられた。マルベルデを囲んだ石にもこのウルトゥスの影響があったのだろう。ウルトゥスについては、秋山あきら著、「聖遺物崇敬の心性史 西洋中世の聖性と造形」、講談社、2009年、pp. 16-19を参照。
10. 小林、前掲書、p. 119.
11. この他に短いクロス・ボータイ・タイプのものもあり、この場合は襟元ボタンをきちんと留めている。そもそも長袖シャツ（両胸ポケット）が白いというのかなり洒落者に変容させている要素である。また大きい襟の意匠は1930年代のメキシコ系米国人若者ファッションだったズートスーツからの引用のようにも思える。このデザインのシャツはマルベルデの生前にはないものだった。
12. 小林、前掲書、p. 121.
13. 小林、前掲書、pp. 121-122.
14. 小林、前掲書、p. 122.

15. 小林、前掲書、p. 123.
16. 小林、前掲書、p. 123.
17. 小林、前掲書、p. 124.
18. 小林、前掲書、p. 124.
19. 小林、前掲書、p. 125.
20. 小林、前掲書、p. 125.
21. サンタ・ムエルテについては、加藤薫著、『癒しの死神を視るーサンタ・ムエルテの図像学序説』、加藤隆浩編「ラテンアメリカの民衆文化」、行路社、2009年、第4章収録、pp.. 85-109、加藤薫著、『図像から見えるメキシコ』、畑恵子、山崎眞次編著、「ラテンアメリカ世界のことばと文化」、成文堂、2009年、II-5収録、pp.. 78-100を参照。
22. 小林、前掲書、p. 127.

<図版リスト> *特に表記がない場合を除いて、図版は筆者の2009年撮影。

- 図01： マルベルデ礼拝堂看板、クリアカン市、メキシコ。
- 図02： ペドロ・インファンテ肖像
- 図03： マルベルデの肖像プラカ、クリアカン市、メキシコ。
- 図04： マルベルデ礼拝堂全景、クリアカン市、メキシコ。
- 図05： マルベルデ主礼拝堂、クリアカン市、メキシコ。
- 図06： マルベルデ主祭壇、クリアカン市、メキシコ。
- 図07： アトーチャの御子イエス像、マルベルデ主祭壇、クリアカン市、メキシコ。
- 図08： 祈祷用木製家具、マルベルデ主礼拝堂、クリアカン市、メキシコ。
- 図09： グアダルーペの聖母像、マルベルデ主礼拝堂、クリアカン市、メキシコ
- 図10： 床におかれた蠟燭に点灯する婦人、マルベルデ主礼拝堂、クリアカン市、メキシコ。
- 図11： 壁一面に貼られた写真エスポト（部分）、マルベルデ主礼拝堂、クリアカン市、メキシコ。
- 図12： 壁に設置されたエスポト（プラカ）の事例、マルベルデ主礼拝堂、クリ

アカン市、メキシコ。

図13: 「貧民の味方マルベルデへの讃歌」を演奏し、歌うクリアカン住民、クリアカン市、メキシコ。

図14: サンタ・ムエルテ礼拝堂、メキシコ市テピート地区、2007年9月筆者撮影。

図15: マルベルデ・グッズを並べた売店、マルベルデ礼拝堂、クリアカン市、メキシコ。

以上。